寺尾

住隆

君

作 曲

その清輝に映えし姫が鏡水は、 観月過ぎゆく晩秋 の夜ょ 穹蒼の天空高く舞ひたる月は今宵満つるかな。 鹿が純瞳に宿らむ。

月影は鹿を誘ひ来たりしこの神無月に何をば見せむ。

流歩む汝は楡に似たれど 今宵も満月は我らを照さむ 時移ろひて の邪帳をはらはむと 人世は変われども

風習に付和せし 風<sup>か</sup>流ぜ を掴まむ芽に感ず

風習だに愛づる その気概 さて映りこむ 我が鏡瞳に 狗と成らざらめや

> 清澄みたる想ひ 知る由もなく 此れは汝の求望にか 今宵の三日月は川面に映らむこまい 人世に充つ解答を自ずと心得 かの日の月影とは違へども

漲る想ひなどか劣らむ 身を委ねばや その清流 さて映りこむ我が鏡瞳に

静と唸りし

閉じなむ凌雲よ こひ願は 汝が想ひは 姫が麗姿を追憶ふべく 今宵も我は朧月を仰がむ 深と落流れ 雨澪したたれば らくば

嗚呼汲まれたし さて映りこむ 我が鏡瞳 月影映えて人影も追ひ得じっきかげは かりけむ晩秋の夜は その厭心